
蝮の孫（仮タイトル）

リード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝮の孫（仮タイトル）

【Nコード】

N2980Q

【作者名】

リード

【あらすじ】

間違えられて殺されて、次に目が覚めたら、美濃の国主斎藤義龍の一子、斎藤龍興（彼のいるはずだった居場所に女子として）に転生した！？

しかも、戦国BASARAの世界の・・・

死亡フラグが思いつきりたっているなか、主人公は努力する。

自分の死亡フラグを叩き折る為に頑張れ、負けるな、努力しろ！！

半兵衛と笹の才蔵は側仕え（年齢が史実と違う！！）。

織田の義理の叔父が美濃を狙ってんのに戦々恐々。

過去の記憶のせいでその時代に画期的な農業形式を生みだしたりとかして、神童とか言われて、そのせいで自分の義理の叔父は興味津津。ああ、胃が痛い。

しかも、バサラの能力あって、目の色が日本人にはありえないから城の中で浮く。

頭の良さとバサラの能力のせいで化け物と呼んでいる奴がいるのも知っている。

ああ、もうひきこもりたい。

・・・ネガティブなのに、民の笑顔を見たら頑張らないと、自分を奮い立たせます。

優しいくせに、転生したことで少し鬱気味。

そんな運のあまりない主人公が戦国の世を駆け抜ける話。

基本BASARA2が主流。

場合によっては3が入るかもしれない・・・

シリアスに見せかけたほのぼのを目指したい。

更新は不定期です。

一話 終わりの始まり（前書き）

サウンドホライズンの始まり方を目指してみた。（語り部と登場人物達）

でも、なんか違う気がする。

最初に出てくる別の漫画のキャラはこの話にしか登場しない予定。

では、どうぞ！！

一話 終わりの始まり

そう言えば、昔、面白い子供に会ったことがありますね。

ボンゴレ主催の肝試し大会の二次会、百物語で、骸は愉快そうに口を開いた。

（真黒い空間、そこにうつすらと明りの灯る小屋が見える）

（そこに座っているのは子供と女。・・・顔は、暗くて見えない）

まあ、その人、この子と一緒に私が話す昔話を聞いて行っただけじゃないかい？

なあに、簡単な事さ、少し口を閉じて私の言葉を聞いてくれればいい。

ねえ、簡単だろう？

聞いて行ってくれるって？じゃあ、そこに腰掛けなよ。

背もたれもきちんとしてるから長い間座ってもいたくないだろう？

私が話す昔話は、それほど珍しくもない、ありふれているような不幸な話。

それがちょっとだけねじ曲がって腐って発酵したような話さ。

それでもいい？

ああ、そう。

後悔しないだよ。

ようし、それじゃあ話そうか。

昔むかしの、物語。

終わりの始まりはそう、一人の少女から始まるのさ。

その少女は、何のこたあない普通の少女だったんだよ。

人間平凡が一番と嘯きながら平平凡凡に暮らしてた普通の子供。

日曜日はぐうたらするけど、いつも遅くまで働いてくれる父親に、

小言は多いけど、愛情を注いでくれる母親、

それに少し天の邪鬼で意地悪だけどなんだかんだで面倒見のいい姉。

そんなありきたりで幸せな家庭に生まれ育った平凡な少女。

普通ならそのまま平和で幸せで平凡な一生を終えただろう。
ところがだ、そうはいかなかった。

そう、全てはうだるような暑い、暑い、暑い、夏の日

壊されてしまったんだよ。

何がつて？そりゃあ、全てがさ。

おや？大丈夫かい？顔が真っ青だ。

そう、大丈夫かい。ソレならいいんだ。さあ、続きを語るとしよう。

その少女はうだるような夏の日に殺されてしまったのさ。

まあ、それだけなら普通の殺人事件で、ありふれた話で終わりだと思っただろ？

ところがどっこいそれは勘違いだったんだ。

というよりも手違いという言葉の方が正しいね。

死神が名前を間違えて刈り取ってしまった哀れな少女。

その子は見えはしないけど聞こえる子でね、その死神のぼやいた内容を聞いてしまったのさ

それを聞いた少女が何を思い、何を望んだのか。

何をしたかつて？

呪ったんだよ。

全てをね。

空や海、風や星にまで呪詛を囁いたのさ。

泣きそうな顔で、怒りを帯びた震えた声で

言葉というものは恐ろしい物だね、きちんとした意思を籠めたモノならば、その言葉には“言霊”という魂と力が宿るモノになるんだ。

その世界は呪われてしまった。

世界を呪ってしまった少女は、死んで魂の存在になり果てても呪詛の言葉を吐いた。

それで、別の境界線の世界にはじき出されてしまったのさ。

顔が真っ青で震えている所を悪いけどね。

ねえ、もう分かっているんだろう？　　、昔の私。

そんなにがたがた震えても、もう君は戻れない。

壊れたガラス細工は壊れたまま、盆から零れた水は零れたまま。

あの陽だまりの様な幸せな時間に時計の針が戻ることはないんだよ。

（顔を真っ青にして立ち去る少女）

（座ったままのまだあどけなさの残る顔をした子供）

—— ああ、逃げてしまった。

追わないのかって？

だって、あの頃の私は死んでしまっているもの。

亡者を追いかけても、なにもおきない、なにもかわらない。
ソレに……。此処は私の夢の中。

そのなかで捕まりも戻りもしない過去を追いかけて何になる？

何を嗤ってるんですか、変な人？

ああ、そもそも人の夢の中に現れる見知らぬ人間なんて変な人間に
決まってますよね。

そういえば、君の名前は？

私の名前を先に名乗れって？私、いや僕の今の名前は喜太郎。斎藤
義龍が一子、斎藤喜太郎。

え、貴女は女でしょうって？

跡取りが僕しかいないのだから、おのことして育てられてるんだよ。

中身と外見と、年齢がちぐはぐの君に言われたくはないよ。

僕も似たようなもんだけど君ほどにちぐはぐじゃあ、ない。

へえ、そうかい。覚えておくよ。

六道の道を行き、骸を作り上げる君の事はね。

さて、そろそろ目覚める時が来たようだ。

お先に失礼するよ。

何？今、僕がいる世界だって？

もう、分かっているだろうに意地が悪いね君。

—— 乱世さ

そう嗤って子供は消えていった。

ということがありました。

思いつきり心霊体験じゃねーかと凍りついたボンゴレ十代目の守護者と関係者がいたことを此処に記しておく。

了

一話 終わりの始まり（後書き）

この主人公はちょっと色ものですが、更新頑張ります!!

二話 神童と呼ばれている子供（前書き）

笹の才蔵の年齢が史実と違う。

主人公は軽いネガティブ。

ヒトの目が怖い。

若干オリジナル設定あり。

なにがあっても基本BASARAだからで、すませられる人推奨。

多少、戦国時代の髪や瞳の色についての事が書いてあります。

二話 神童と呼ばれている子供

SIDE：斎藤喜太郎

目が覚めた。

目に映るのは薄暗い天井。和室独特のイグサの匂いが漂っていた。

むくりと起き上がり、襦袢を簡単に直す。

衣紋にかけられた羽織をはおり、側に控えていた女中を下げらせる。そして、顔を洗いに井戸端まで歩いて行った。

この世界は変わらない。

母親は私には関心がないようだ。

いや、違う。

彼女は、私いや僕を哀れに思うから近づかないのだ。

炎のバサラの能力ちからを持つが故に男として育てられる姫の事を・・・

- ■。世界を呪った女が、この世界で生をうけ、斎藤の一の姫ゆうタになった。だが、バサラの能力ちからを持ったがゆえに性を男と偽り、
- ■ だった女は夕姫になり、そして嫡男の喜太郎になった。

娘の夕姫はいる必要がなく、嫡男の喜太郎にしか価値がない。

女中達も、人が同じ年頃の者達よりも話し、書き、作法を習い始めた僕を神童と呼ぶものもいた、鬼子と言うものもいた、化け物と言うものもいた。

だあれも、恐れて近づかない。

城主の唯一の跡取りという身分のせいでもある。
しかし、それよりも大きな理由は
この、日本人にはありえない、灰が混じった暗い緑の瞳のせいだろ
う。

これを恐れなかったのは爺様、父親と僕の側仕えの才に重虎しげとらと、学
問を教えてくれた住職、乳母のお清だけだ。

ああ、駄目だな。

考え始めたら僕の事を見るあの目の事も思い出して気持ち悪くなっ
てきた。

気持ち悪くて、怖い、嫌だ、恐ろしい。

頭が真っ白に染まって、思わずしゃがみ込む。
地面に投げ出した指が土を掻きむしる。

嗚呼、なんて気持ち悪いんだろう。

呼吸が上手くできない、息を吸って吐くという生き物にとっては当
たり前の事も上手くできない。

まるで、深海に溺れた魚のようだ。

喉がひきつったように擦れた音を立てる。

誰か、誰か、だれか助けて！！

涙が滲んできた。

喉から、出るのは言葉ではなく、ひきつった吐息。

壊れた、機械のような擦れて軋んで不協和音が喉から零れ落ちる。

痛い、辛い、気持ち悪い。

酸欠で頭が殴りつけられているかのように痛む。

「　　、　　！！」

気を失いそうになった時に、私／僕の事を絶対に守ってくれる声が、
―――声が聞こえた。

S I D E：可児吉長

俺の名前は可児吉長。通称は笹の才蔵。

美濃の国主斎藤義龍様に仕える家臣。

というのはもうすでに名目上だったりする。

それは、何故なら、俺の槍は夕姫様、いや、御屋形様のご嫡男喜太郎様にささげているからだ。

幼い頃から、神童の誉れが高い、喜太郎さまの守役兼側仕えを務めているからである。

最初にソレを義龍様に命じられた時は、なぜ俺なのかと思った。

俺は戦場働きはできても、ご嫡男の側仕えなどは得意分野でも何でもないことだったから。

困惑した。

その、俺の困惑した様子を見た御屋形様が説明をしてくださったが・

つまりは、こういう話だった。

義龍様のご嫡男の喜太郎様。唯一の跡取りであり、祖父である道三様のバサラを、叔母である帰蝶様以外に受け継いだ唯一の御方だ。此処、美濃は天下の要衝、そして豊かな国でもある。

その跡取りの喜太郎さまは暗殺される確率が異常に高い。――

――実際にバサラにお目ざめになったのは一歳の頃に暗殺されそうになった時だと聞く。

だから、家中でも腕のある俺を側仕えにする。そういった理由があったのかと納得した。

だが、もうひとつの理由を聞いてこの父親を殺し、稲葉山の城主に、美濃の国主になった御屋形様も、親であったのかと驚いた。

「――もうひとつ、理由はある。お前の目や髪が“違う”からだ」

「喜太郎は、その目の色が“違う”せいで、引きこもり気味だ。色は違うが自分と同じ“違う”人間がいたら、心を開くだろう」

――すまないが、宜しく頼む。

そついつて、人払いをしてあるからといって頭を下げられた義龍様は、子供を思いやる父親の顔をされていた。

そついつた経緯で俺は喜太郎さまの側仕えになった。

今では、少しだけだが、信賴されていると思う。

俺の金の髪、青い瞳を見た時、喜太郎様が言った言葉は今でも忘れられない。

深い緑に銀色が散った不思議で綺麗な瞳を煌めかせて、珍しく、微笑んで。

――才蔵の髪と瞳は、お日様と空の色だ。

とそう、いった。

綺麗な綺麗な微笑みだった。

家中で、神童だと言われているのと同じくらい言われている人形のようにだ、という言葉が嘘のようにきれいな笑顔で、そう、言った。

それからだと思う。

俺が、必死になって彼の人にお仕えするようになったのは。

あの綺麗な笑顔を守りたいのだと思った。

まあ、それから色々あつて彼の人が姫君にあることを知って、ひと悶着あつたがそれはまたの機会に、

ああ、あそこにしゃがんでいるのは、喜太郎様だ。

何故、しゃがんでいる？

此処まで奇妙な呼吸音が聞こえる。

――また、発作か！！

「くっそ、俺のたわけ!!——喜太郎様!!」

二話 神童と呼ばれている子供（後書き）

主人公のバサラは炎。美濃の斎藤から尾張の織田に嫁いだ濃姫（帰蝶）は、ゲームで炎のバサラだったので、姪の主人公のバサラは炎。お父さんは、母方の風である。祖父の道三は炎のバサラを持っていました（捏造、この小説の中では）。

才蔵は主人公よりも7つか8つくらい年上のイメージ。

この時から、強いと有名だったバサラの能力持ちの武将。（この小説の中では）

金髪碧眼。

バサラの能力者には、髪や瞳の色が、一般人とは違う人間が多いという設定です（この小説の中では）（三成、光秀、半兵衛、かすが、佐助、風魔、長曾我部、いつき、など髪の色や瞳の色が違うバサラキャラが多かったから）（茶髪や黒髪のキャラは除外）。

三話 付き人と幼主（前書き）

微妙にかみ合わない二人。

時間軸とかねじ曲がりまくりですが、それをBASARAだからで済ませれる人だけが見てください。

そもそもBASARAで出て来ない国と家だから捏造の塊。

では、どうぞ！！

三話 付き人と幼主

SIDE：竹中重虎（後の竹中半兵衛）

瞼がふるりと揺れる。

ゆっくりとうつすら開く、僕の顔を映す生氣のない瞳。
ぼんやりとした焦点が、僕の瞳と交差する。

色の白い、柔らかな肌は青白くなり如何にも病人の様な風貌を晒している。

銀が散った深緑の瞳も、黒檀の色の艶やかな美しい髪も、整いつくされた顔立ちも、
真つ青な顔色のせいだとてつもなく具合が悪そうに映る。

まあ、実際に調子が悪いんだろうけど。

そんな事をつらつらと考えていたら、夕姫、じゃない喜太郎君が身体をおこした。

「・・・重虎しげとが運んでくれたのか？」

「僕に同い年の君が運べるわけがないじゃないか、才蔵だよ」

「そっか、才か・・・」

そうやって、また力なくぽすんと布団に戻った。
やっぱり顔色は悪いまま。

僕もあれだけど、喜太郎も病弱だ。

「ゴメン、」

「なんで、君が謝るんだい。僕に謝るのだとしたら、君を理不尽な色眼鏡で見る脳無とボンクラだけだよ」

よわよわしい表情で絞り出すように謝られた。

「でも、僕のせいで、重虎や才も悪く言われているのだろう?」

・・・どこで知ったんだ。黙っておくように言ったのに!!

「飛驒守ひだのかみがそう言ったのを聞いた。——「ごめん」

ごめん、と呟くように謝る声に、泣きそうになった。

君が悪いわけじゃないだろう!!と叫びたかった。

そんな事を言っても君は信じない。

でも、それでも君は謝り続けるんだろう。

——言葉じゃ、君を癒せない。

何を言っても受け入れないだろう。

彼女の身を責めるのは、自身の事を嫌う母方の家臣の一派。

それに自身の自責とか自嘲の念で、一杯だ。

唇をかみしめる。薄ら、血の味がした。

今の僕では君を守れない、癒せない。

——悔しい。

もっと、力が、力が欲しい。

守りたいものを守りきれ、そんな力が、欲しい！！

でも、そんな事を考えている僕に、

「重虎。僕はね、君や才蔵がいてくれれば何もいらないよ」

——僕のせいでいろいろ言われているのは分かっているのにね。困ったな。君達を手放せそうにない。

そう、零すひと。

欲しい言葉をいつもくれる。

僕が君にあげられない言葉を、いとも容易く、花に水をやるかのようになんて与えてくれる。

そんな君だから守りたいんだ。

「……言われなくても、傍にいるよ。僕が、決めたんだ。強制されたわけでもなく誰に命ぜられたわけでもなく、自分で決めたんだ」

——僕は、何を言われても君から離れないよ。

そういうと、

喜太郎は綺麗な銀混じりの緑の瞳を見開いて、

そ、っか。

そう、嬉しそうにほほ笑んだ。

そう微笑む君の事が、僕は好きだ。
だから、純粹に守りたい。そう、思ったんだ。

S I D E：斎藤喜太郎（主人公）

まるで何か乗せられているかのように重い瞼をこじ開ける。
ぼんやりと映ろう視界。

そこに映ったのは、逆さに映る重虎と見なれた天井。

ぎよっとした。

何故、自分が自室に寝ているのかも分からなかったし、重虎がいる
のも分からなかったから。

布団に横たわっていた身体をゆっくりとおこす。

多分、また例の発作が起こった僕を運んでくれたんだろう。
頭が回り始めて冷静な判断力が自分に戻る。

これだけは聞かないと、いけない。

「・・・重虎じゆうこが運んでくれたのか？」

「僕に同じ年の君が運べるわけがないじゃないか、才蔵だよ」

綺麗な高い声が返事をしてくる。

また、僕は才と重虎に迷惑をかけたのだろう。

「そっか、才か・・・」

そうやって、また力なくぼすんと布団に戻った。
本当にふらふらする。

今、僕の顔色は相当悪いだろうな。

だって、重虎が分かりにくいけど不機嫌そうに顔を歪めている。

「ゴメン、」

とがめられているような気がして思わず謝る。

「なんで、君が謝るんだい。僕に謝るのだとしたら、君を理不尽な色眼鏡で見る脳無とボンクラだけだよ」

逆に心底不愉快そうに言つてのける重虎に苦笑が零れそうになる。

「でも、僕のせいで、重虎や才も悪く言われているのだろうか?」

重虎が顔を歪めるのが分かる。罪悪感がわくけど、それでも、伝えておかなければならなかった。

僕のせいで二人が悪く言われるのは耐えきれない。

「飛驒守ひだのかみがそう言ったのを聞いた。——ごめん」

ソレを呟くように零した時の、泣きそうな重虎の顔を見て泣きそうになった。

僕は、そんな顔させたくないのに、何時もそんな顔をさせてしまう。自分のせいで大切な君達が悪く言われているのも知っている癖に自分の傍から、離さない。

多分、いや、きっと、僕から離れたほうが君達は幸せになれるのだ
ろう。

母上達一派から、悪く言われることもなく。

父上の一派からも、色眼鏡で見られない。

そんな、家臣としての幸せを掴めるんだろう。

そんなこと分かり切っているのに、その手を離せない自分が嫌いだ。

才の撫でってくれる温かい角ばった手が好き、僕と一緒にいてくれる重虎の少し呆れたようなでも心配されていると分かるあの温かみのある声が好き。

好きな所なんて数え切れないほどある。

だから、手放せない。

自分のせいで色々言われているのに手放さない僕の、何と、醜く、浅ましい、心か。

「重虎。僕はね、君や才蔵がいてくれれば何もいらなないよ。――僕のせいでいろいろ言われているのは分かつているのにな。困つたな。君達を手放せそうにない。」

自嘲気味になりながらも思わず、零した。

母親は嫌い、この目も嫌い、こんな力もイラナイ、それなのにそのせいで会えた人間は手放せないのだから笑わせる。

そんな、綺麗事を吐く自分が一番嫌い。

嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い
嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い

[illegible]

思考の迷い道に入った僕に、重虎が声をかけた。

「・・・言われなくても、傍にいるよ。僕が、決めたんだ。強制されたわけでもなく誰に命ぜられたわけでもなく、自分で決めたんだ。」

「僕は、何を言われても君から離れないよ」

そう、紫の目で真つ直ぐに僕を見据えて、凜とした声で言った。

目が見開いて行くのが分かる。

その、言葉は僕にとっても優しい言葉で、思わず言葉に詰まる。

「そ、つか」

それだけ告げて、口角が上がった。

そんな、事を言うてくれるから、手が離せなくなるのにね。でも、君のその言葉が嬉しいんだ。

三話 付き人と幼主（後書き）

微妙にかみ合わないくてずれてる二人。

優しいやさぐれ、軽く鬱になりかけのマイナス思考主人公を守りたい半兵衛と、実はこっそり凄まじく才蔵と半兵衛に依存している主人公。ヤンデレにはしないようにしたいです。

大まかなルート的には3つ考えています。

敵対し、美濃を叔父から守りきって国主のままルート（この場合半兵衛はずっと主人公の傍を離れず）と美濃を不意打ちでとられちゃって秀吉と同盟を組んで美濃を奪い返すぜルート（半兵衛は秀吉の所の客将）。母は浅井久政の娘、つまり長政の腹違いかなんかの姉（この小説の中では。でも史実的にはマジで浅井久政の娘（妹）らしい）で長政は叔父なので浅井も含めて織田勢と仲良く日本の中央は押えてのんびり幸せだぜルート（この場合も半兵衛は傍にいると思う）。

四話 忍び殺しと名無しの忍び（前書き）

展開がオリジナルです。

結構、猟奇的というかスプラッタです。
血でどろどろともいいます。

それでもいい方はどうぞ。

四話 忍び殺しと名無しの忍び

SIDE：喜太郎

てん、てん、てん、と赤い雫が顔にかかった。

息を飲むほど赤く、赤く、赤くて、紅い。

人の屍から吹き出る紅い雫が顔にかかった。

民の税から使われる質の良い薄青の着物は、ほとんど紅い血で見ても無残な様相をなしている。

才蔵や重虎がいない時を狙っての犯行だった。

二人ともどうしても私の傍を離れなければいけない、その日常における僅かな隙間を狙った犯行。

敵ながら見事、だ。

それにしても、家臣たちがようやく曲者に気付いたのに、ワラッタ。

私が助かったのに顔を安堵に包みながらも、目だけが冷徹な光を帯びているものがいたのに気付いたから。

ああ、御前等が仕組んだのか。

そんなに私が邪魔なのか。

そんなに美濃を、私の故郷を、私が守るべき民の事も考えていないのか、害したいのか。

安心しろ、私だって

——御前等なんか知らない。

私の守りたいものを害そうとする愚か者なんか、

イラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラ
ナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイ
イラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラ
ナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイ
イラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラ
ナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイ
イラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラ
ナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイ
イラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラナイイラ

——消えてしまえ。

ヒュンと血を飛ばして、カチツと鞘に刀を収める。

三人襲いかかって来て、一人は首を、一人は心の臓を、最後の一人は腕を斬って気絶させた。

三人も斬ったから、私は真っ赤だ。

血で赤くて紅い。むしろ、酸化をし始めているから黒に近い、ドス黒い紅になっている。

匂いもひどい。

この匂いだけは、一度死んだことがあるだけに耐えきれない。
気持ち悪いし、この纏わりつく感覚がうざくて堪らない。

「つつつ・・・」

呻く忍びを手当てをする様に命じ、なおかつ私につくように命じられた家臣の中でも忠実な人間に、情報を聞き出すように命じる。

美濃の国主、斎藤義龍の唯一の跡取りである斎藤喜太郎を狙ったんだから、コレぐらいの措置が当たり前だ。情報を聞き出して雇い主を誰か特定しなければならぬ。

慌ただしく家臣たちが動きまわる中、私を冷たい目で眺めてくる人間に向かって、私はワラツタ。

自身に持てる最大級の嘲りと怒りを籠めて相手の髭面なんぞ見たくないから、近くにいた侍女を捕まえて湯殿の準備をさせる。

この濡れて気持ちの悪い装束を早く着替えたい。

「・・・ん？」

視線を感じたか、誰もいない。

念のために刀を湯殿にまで持って行くことにした。

乳母であるお藤に湯殿の番をさせる。

控えの間でだ。

女であることを隠しているのだから、コレぐらいの措置は当たり前だ。

そう、当たり前なのだ。

SIDE：幼い頃から仕えている家臣

そのぞつとするような美しい顔に、^{かんはせ}熱烈な記憶がよみがえる。

ずっと昔、蝮と呼ばれたかの御大が人を殺した時と同じ冷たい目線。視線だけで人を殺せるような美しいからこそ恐ろしく冷たいその目！！

こときれた忍びをその瞳で見降ろしながら、何事もなかったかのよう
に刀をしまってお姿を見て、驚愕よりも安堵の感情が胸に湧き上
った。

ああ、良かった。若様は無事だ。

元々は姫君であられたのに家の都合で男子^{おのこ}として育てられている、
現時点で唯一の斎藤家の跡取りである彼の人に怪我がないことを心
底安堵した。

それと同時にその冷たい眼差しが存在することが自身等には深く後
悔の念が生まれたけれど。

まだ幼いこの御方がそんな目をする様になっただのは我らのせいだ。

道三様、御大の炎のバサラを嫁がれた濃姫様以外で受け継いだ唯一
の斎藤家の姫。

本来ならば姫として生きられたのに、御屋形様も御方様もこの御方
が姫として育たれることを望まれていたのに、我ら家臣一同が跡取
り。つまり斎藤家の嫡男として育て上げられることを望んだ。

何故なら、この御方の持つ炎のバサラによって御屋形様が本当に道
三様の御子であることが一番望ましい形で民草に伝わり分からせる
ことが可能だからだ。

その為に若様はまだ二歳にも満たなかった幼児の頃からおなごではなくおのことして育てられた。

姫でいられたなら背負わなくともよかった責を背負う為に。

その環境を憐れんで御方様は、若様に会おうとなされない。滅多に会わず、そして会話も殆どないことから若様は自分が御方様に嫌われているのだと信じ込んでいる。そして、御方様の実家からついてやってきた家臣どもは若様を誅して、斎藤の家督。つまりは美濃を奪い取るうとしている。

御屋形様もその地位にいるせいで、親子の会話なぞ無いに等しい。

若様の傍に信頼できる忍びと家臣をつけただけだ。

そして若様の傍に何時もいるのは傍付きの可児殿と竹中の倅だけだ。

親に愛情を注がれるはずだったのに、それすら満足にもらえなかった子供。

そして何よりも、瞳の色が違うせいで生まれてから御屋形様が排除なさるまで針のむしろにさらされたせいか、感情を出しにくく、表情をあらわにしない御方になってしまった。

———それが、私の後悔である。

S I D E : X X X

綺麗なひとを見た。

それは殺すように里の上層部うへから命じられていた、美濃の後継者だった。

神童、鬼才、美濃の麒麟児と謳われる、斎藤義龍の唯一の跡取り。
美濃の虻と呼ばれた斎藤道三の炎のバサラを織田に嫁いだ濃姫以外
で受け継いだ真正正銘の美濃の国の跡取りである。

黒檀の様な髪に、恐ろしい程に整った顔。

そして、遠目からでもひときわ目を引く銀が散った深緑の瞳。

深淵の闇を内包したその深緑の瞳にゾクリとした。

深い叡智とそれには似つかわしくない生々しい感情が混じった複雑
な色合い。

調べた結果だけを見ると淡白で人形の様だった斎藤喜太郎が、酷く
生々しい感情を持つ人間だということに気がついた。いや、気付か
されたの間違いだろう。

それほどまでに複雑で醜くてそれだから美しい瞳に姿。

心がない、鬼子、羅刹、忌み子と嘲り罵倒され続けた自身の中に何
かが弾けた。

“この方に仕えたい”

その一文が頭に過る。

その方が向かう方向に同族が移動するのを察知しながら、自分もそ
の方向に移動した。

四話 忍び殺しと名無しの忍び（後書き）

一回死んだら、戦国の時代で今までの常識やら倫理やらありえない時代に来てしまい、幼い頃から暗殺、謀殺、毒殺等の危機にさらされ続けた結果。人の生死や血、叫び声を見ても聞いても何も感じなくなつた主人公。そっち方面の感情は麻痺しているか壊死しているあと、暗殺を狙われ過ぎて、忍びの動きを察知できるほどに生粋の忍び殺しになつてしまった。

この小説の主人公は後ろ向き思考のネガティブではっちゃけると凄いことになる主人公です。

五話 可哀そうな子供（前書き）

無理やり子どもの未来を定めた事で罪悪感ありまくりの両親と、それをみて私嫌われてるんだろ？なあと前世の事も相まって鬱になりかけの主人公。

そして、明智の部下の妹が嫁いだのは本当は元親にですが、此処では彼の父親の国親さんに嫁いだ事になっています。ご了承ください！

五話 可哀そうな子供

SIDE：喜太郎

パシヤンと湯殿に水音がこだまする。

白くけぶる視界。

熱気と水音に支配されていた。

（今日は三人。今月に入ってもう五人目だ…）

パシヤンと足で水を蹴る。

湯帷子から覗くのはまだ第二次性徴を迎えていないか細く生っ白い足。

おのこ男子らしくない、細い足。
おなこ女子の私の足。

そんな、些細な事を見せつけられたようで泣きそうになる。

（私が、男子として生まれていたのなら…）

そんなありえない仮定もしの話が頭をよぎる。
坂から転がる石の様に、その考えは止まらない。

（母上は、私を愛してくれたのだろうか？）

意味の無い仮定。

だけど、普通の家庭なら当たり前前に与えられていたこと。

もし、最初から跡目を継ぐ男子だったら、

もし、こんな目の色をしていなかったら、

もし、バサラの能力なんてなかったら、

もし、こんな記憶を持ち合わせた子供でなかったのなら、

頭を撫でくれただろうか？

声をかけてくれたのだろうか？

褒めてくれたのだろうか？

怯えたような目で見つめられずに済んだのだろうか？

——普通の親子の様になれたのだろうか？

（馬鹿らしい…。そんな仮定なんかしても意味なんかないのに）

そんな議論なんて、ありえないものだ。

手に入らないと分かっているモノなら、最初から諦めてしまえばよかったのだ。

欲しいと思っても手に入らないのなら辛いだけだ。

もう手に入らないモノに期待するのはやめたのだ。

手を伸ばすのも、期待するのも、もう疲れた。

ただ、せめて守ろうと思った。

手に入れたものを、守りたいと、そう思った。

だから、せめて立派な当主になろうと決めた。

父の事はよく分らない。

けど、国や民草のことは大事にしている事は知っていた。

多分、分かりにくいけど私の事を気にかけてくれているのを知っている。

国主になったら、全力で守れるだろうから。

この国が私は好きだ。

民も大切だと思っている。

私の傍に居てくれる家臣たちだって守りたい。

父を支えて国を守るのに力を注いでいる家臣たちの事だって守りたい者に入る。

…母上だって、生みの親なのだから情がないと言えるばっそになる。母上についてきた家臣たちはいただけないが、それくらいだ。

そんなことを考える私は甘いらしい。

変わってしまうのなら、私は甘くても構わない。

ただ、守りたいモノを守るだけだ。

重虎のように頭がいい訳じゃないけれど、凡才には凡才なりの意地がある。

貪欲になろうと思った。

そうでもしなきゃ守れない。

でも、ふと思う。

（普通の子供で良かったのに…）

SIDE：お清（喜太郎の乳母）

損をしているし、不器用すぎる。

あの御方を見る度にそう思う。

子供らしくない子供にならざるおえなかった子供。
炎のバサラをその身に宿し、普通の笑顔よりも先に作り笑顔を覚えてしまった子供。

好奇と嫌悪の視線にさらされて、気付かれるまですつと我慢して傷だらけになって、心をすり減らして、感情が凍てつきかけて、表情をあらわにしないようになった、御方。

優しい、人なのに。

どうして気付かないんだろう。

本当は、普通の子供で、親に甘えられないくらい不器用なだけなのに。

この方をよく見てれば気付くはずなのに、殆どの人は“天才”、“麒麟児”、“鬼才”だからと理由をつけて言いきって近づかない。

「（何て、可哀そうな御方）」

「・・・清^{きよ}？」

その常磐色の瞳で、どうかしたのかと尋ねてくる。

こんなにもこの方は優しい、なのに。
損をしてばかりだ。

「いえ、何にもございませぬ。 姫様」

「姫様と呼ぶのはよせ。——私は嫡男なんだからな」

そう、諦めたように、姫様は笑った。

SIDE：斎藤義龍

「と、いうわけで土佐の長曾我部家ちようそかへに行つて来い」

「何がというわけでなのかよくわかりませぬ、父上」

暗殺されかけ、朝の着物とは違う色の着物をまとった娘、・・・名目上は息子になっている子供は下座で訳分かりません、といった顔をしていた。

常に張り付けている無表情の顔がいささかあきれ気味な眼差しを俺に向けてくる。

「お前は知らないかもしれないが、長曾我部家の当主国親くにちかに、我が異母妹いもつと帰蝶の生家の明智家の部下の妹が嫁いでいる」

「それは昔、お清から聞いた事がございます。しかし、それが私が土佐に行く事に関係があるのでしょうか？」

不服そうな声色で、言葉を告げる我が子の表情は読めない。

「我が家には海は無いが、あそこはカラクリが有名だ。・・・学習がくしゆして来い」

「・・・畏まりました」

俺の言いたい事を察したのか、スツと儀礼通りに頭を下げる我が子は非の打ちどころがなく大人の振る舞いで、自分の子供を誇らしく思うと同時に、一抹の寂しさを感じさせた。

俺らがこうしてしまったのだ。この子供を。大人にならざるを得な

くしたのは俺だ。

「では、父上。準備もありますので失礼いたします」

「ああ。・・・待て、喜太郎」

声をかけられると思っていなかったのか、子供の肩がピクリと震える。

「父上・・・？」

くしゃりと柔らかな髪を撫ぜる。

そういえば、こういうことをするのは子供が物心がついてから始めてかも知れん。

おずおずと子供が俺の小袖の袖を握る。

「——無茶するなよ」

思わず、そう言葉をかけていた。

五話 可哀そうな子供（後書き）

これからがんばります!!

六話 土佐の姫若子と美濃の麒麟児（前書き）

元親さんが元服する前の姫若子だった時の話。

六話 土佐の姫若子と美濃の麒麟児

SIDE：喜太郎

私は今、歓迎の宴の中に居る。

土佐の国主の国親様は父上の知己とも言える間柄なんだそうだ。それで、その知己の嫡子である私とそのお供の家臣たちはこうやって宴で歓迎されているらしい。

それにしても海の幸なんて久しぶりに食べたよ。

私の故郷の美濃は内陸の山国だから山の幸は豊富にあっても、マグロなどには滅多に食べる事はできないからな…。その代わりに、温暖な気候と恵まれた土壌のおかげでお米や酒、鮭や栗に山葡萄、柿にその他e t c . が収穫できるのだけど。

—— やっぱ海も欲しいな、塩とか貿易の利益も手に入れられるし。

それにしても、ちょっと食べすぎて気持ち悪い。

そばの家臣に声をかけてからこつそりと宴会場を抜け出す。

お前ら、勧められたからって酒飲み過ぎなんだよ…

土佐の人間は酒豪ばっかだしよ…

私の気持ち悪くなった理由に絶対酒の匂いってのも存在するからな…

縁側を吹き抜ける風が前髪を揺らす。

下弦の月を眺めながら、一息をついた。

「—— 気持ち悪い」

若干頭も痛い。

鈍痛がする。

「……あ、の」

「ん？」

「大丈夫？」

振り返るとそこには、銀の髪をした天女がいた。
凄く可愛い、姫君。

薄紫の豪華な着物に白の打ち掛けを着ている。
でも、可笑しいな長曾我部に姫は一人しかいなくて、黒髪の姫って
ことで有名なのに。
この子は誰なんだろう。

「ああ、うん。大丈夫だよ」

「そっかあ、よかった」

そうニッコリ笑った姫の顔は片目を眼帯で隠しているのを差し引いても美しい。
将来の美貌を確信させるような顔立ちだ。

「ねえ、君は誰なの？」

思わず名前を聞いていた。
その姫は、薄青の瞳で私を見つめた。
私も見つめ返すと、

「えっと、ね……」

姫がおずおずと答えようとした、その時ガラッと障子が開いた。
銀の髪をした土佐の国主、長曾我部国親様が顔を出した。

「ッ!!」

銀の髪の姫は、くるりと踵を返して足早に立ち去ってしまった。

「え・・・?」

残された私は思わず呆けたような声を出してしまっ
え、逃げた? 何で、わけ分かんない。

「弥三郎!! 待て!!」

国親様は銀の髪の姫を追って去っていく。

え? ちよつと待て、弥三郎?

長曾我部の嫡男の名前だね、それって。

え? 女の子にしか見えないんだけど...

「・・・・・・・・!!?」

思わず、側に居た長曾我部の家臣に尋ねると、呆れたような顔を
して答えてくれた。

お酒に酔ったまま、不満をぶちまける様に、先ほどの嫡男について
話してくれる。

「弥三郎様は、姫若子つめわいなんだよ」

「ひめわこ・・・?」

「喜太郎様の様に若子らしくない、姫の様な若子のことさ!」

ソレを聞いた私は、ただ曖昧に笑う事しかできなかった。
私、本当は若子じゃないし……

SIDE：弥三郎

きれいな子が縁側に座っていた。
男の子の格好をしてるから多分男の子だ。

艶のある鴉の濡れ羽色の髪に、見たことの無い位きれいな銀が散つた緑の瞳。

切れ長の瞳は月をジッと見つめていて一幅の絵のように美しい光景だったのだ。

しかし、その顔色は悪い。

頭に手をやってその子は呟いた。

「——気持ち悪い」

思わず、声をかけた。

もしかしたら、仲良くなれるかもしれないし。
友達になってくれるかもしれない。

「……あの」

声が上がった。

変な子だと思わなければいい。

銀の散った緑の瞳が私をきょとりと見つめる。

「ん？」

気が緩んでいるのか顔つきがさつき月を見ていた時よりも柔らかい。そんな気がする。

「大丈夫？」

正面から見たその子は、やっぱりきれいだった。

薄藍の小袖に濃紺の袴、袴よりも黒に近い藍色の羽織。

どれも華美ではないけど趣味はよく上品な雰囲気がある。

それを見て、この子、土佐の出身じゃないなって気がついた。白い肌が淡く月の光で輝く。

「ああ、うん。大丈夫だよ」

こてんと軽くうなづくのが見えた。

「そつかあ、よかった」

思わずはにかむとその子は、僅かに目元を緩めた。

そして、口を開く。

「ねえ、君は誰なの？」

本人も思わず聞いてしまったといった風で、少しだけ驚いた顔をしていた。

思わずじっと見つめる。

この髪や瞳を見ても、忌避したり驚いたりしなかったその子は静かに私を見据えてきた。

光の加減で淡い銀にも見える瞳を見つめながら私は口を開く。

「えっと、ね……」

口を開こうとしたら障子が開いた。

そこに居たのは、怖い顔をした父上。

私が男らしくない事をしているのに、反対している。

「ッ!!」

思わず踵を返して駈け出した。

せっかく同じ年くらいの子と仲良くなれる絶好の好機だったのに!!
父上の馬鹿!! 邪魔しないでよ!!

六話 土佐の姫若子と美濃の麒麟児（後書き）

これから頑張ります!!

七話 美濃の蝮と尾張のうつけ（前書き）

文中に出てくる六尺五寸は昔の身長的事了。

斎藤義龍は身長190センチ越えの大男だったそうですので使わせてもらいました。

あと、いきなり時代がぶっ飛びましたがあまり気にしないでください。

それでは、どうぞ!!

七話 美濃の虻と尾張のうつけ

その瞬間静かな、部屋に怒号が満ちた。
さざ波の様に怒気が、広がっていく。

「何だ、これは!!」

「尾張のうつけが、どの面下げて斉藤を愚弄する!!」

「弟殺しが!!」

家臣たちの怒号に満ちた叫び。

軍議は乱れに乱れた。

その原因はこれにあり。

美濃を寄越せ。さもなくば、死あるのみ。

そう書かれた書状。

いや、書状というのも愚かしい。

こんなもの、ただの宣戦布告だ。

例え、戦力の差があるにしてもこれを受け取ったからには引けぬ。
此处で引いたら武家の名折れ、武士としての名声は地に落ちよう。
例え、敗戦の色が濃厚でも此处で引いたら斉藤の名は地に落ち。
家臣団から見下されよう。

現在も、義龍様が亡くなられて起きた騒動を終息させ。

殿の産業治水の事業が軌道に乗った所であるのに。

此处で引いたら、美濃は滅ぶ。

そこまで、考え抜かれあざ笑うかのように挑発をしてくている。

で、あるならば、どうして戦わずしていられよう。
引くも地獄、進むも地獄であるならば、進むしか道はなし。

銀が散った黒に近い深い緑の双眸がこちらを静かに睨みつけている。
それに黙って目礼した。心情は察するに余りある。

なぜならばこの書状は彼女いや、彼の義理の叔父にあたる織田上総おたかすさの
介信長すけのぶながからの代物だ。

国主である彼の人に向けて書かれた書状。

尾張の親戚がよこした初めての文には、鈍い殺意しか起こらないだろう。

「美濃の真たる後継はこの信長、か」

そこまで読むとご当主であらせられる齊藤龍興様さいとうたつおきは、冷たく嗤った。

その笑みに軍議が水を打ったように静まり返る。

彼の人独特の緑の瞳がつうと細まった。

瞳が蛇の様な縦の瞳孔に変わり始める。

これが、美濃の虻。

列記とした美濃の血を引く後継よ。

「ふ、つぶははははははははは！腹が捻じれる。私の義理の叔父
は気がふれておるらしい」

狂ったように笑う、声。むしろ、哄笑。

ああ、これは怒っている。

いつも、上限がないほど懐が広い為に忘れられがちだが、この人だ
って人間ひとなのだ。

それを、このような怒りで思い出させられるとは、最悪だ。

「美濃があれのもの？この地は、美濃の者の血で作られた。それを

まあぬけぬけと、余所者の大将風情が粹がるな！！」
尾張のつつけ

ダンと音を立てて、足が書状を踏みにじった。
ぐしゃりと音を立てて紙がよじれていく。
床がみしりと、嫌な音を立てて割れた。
バキリと板が割れ、木片が飛び出す。
それでもまだ、にじり踏むのをやめやしない。

一体誰が想像したであろうか。

幼少時には美濃の麒麟児、美濃の鬼札、さいとうよしたつ六尺五寸にはもったいなき
子息と称され、現在では温厚であり静謐を好む有能な国主であると
称される斉藤龍興公が、戦場でも非ず、この様な激情を表に出す
は。

家臣の誰も想像がつかなかったであろう。

そして、彼の人は我らの視線に動ぜず。
ただ黙し深緑の双眸で一座を睥睨した。
冷え切った瞳が雄弁に物語る怒り。

ぞつとすると同時に今は亡き御屋形様を思い出させるその姿に胸を
打たれた。

嗚呼、この御方こそが美濃の国主ぞ。
極楽の御二方も照覧あれ！！

「それにしても叔父は一体何と書き損じたか……それとも本気でゆ
うたのか。美濃の虻の首を斬ると」
うつけ

ぞつとするような声色。

絶対零度の冷たさが床を這って浸食する。

ゆらりと龍興様は立ち上がる。

自然と視線が集まった。

龍興様は、ゆつくりと口を開く。

「誰ぞ、うつけにも分かる文字で返書を。この美濃に埋まるは尾張のうつけ、貴様が首と」

それは、宣戦布告。

「……皆の者、戦支度を急がせよ。——これから、尾張との大戦じゃ」

静かに歩を進める姿は優美であつて、それでいて凜としている。彼の人が女性として、姫として育っていたならば三国一の美女と評されたことだろう。

我が進めた事ながら、胸が軋んだ音を立てた。

「私、自ら出る。^{みず}——お爺様からの織田との因縁、此处で断ち切らせてもらおうぞ」

そうやって、微笑む姿はどこか、御屋形様に似ていた。

七話 美濃の蝮と尾張のうつけ（後書き）

視点は名もなき家臣その一。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2980q/>

蝮の孫 （仮タイトル）

2012年1月13日15時45分発行